

社会学「近代とは何か」 メディアスクーリング

担当 徐玄九

15 総括

①「社会」

＝比較的大人数の人々がそのなかで生活を営んでいる制度や関係の総体とその状態を指す。

②「常識を疑う」

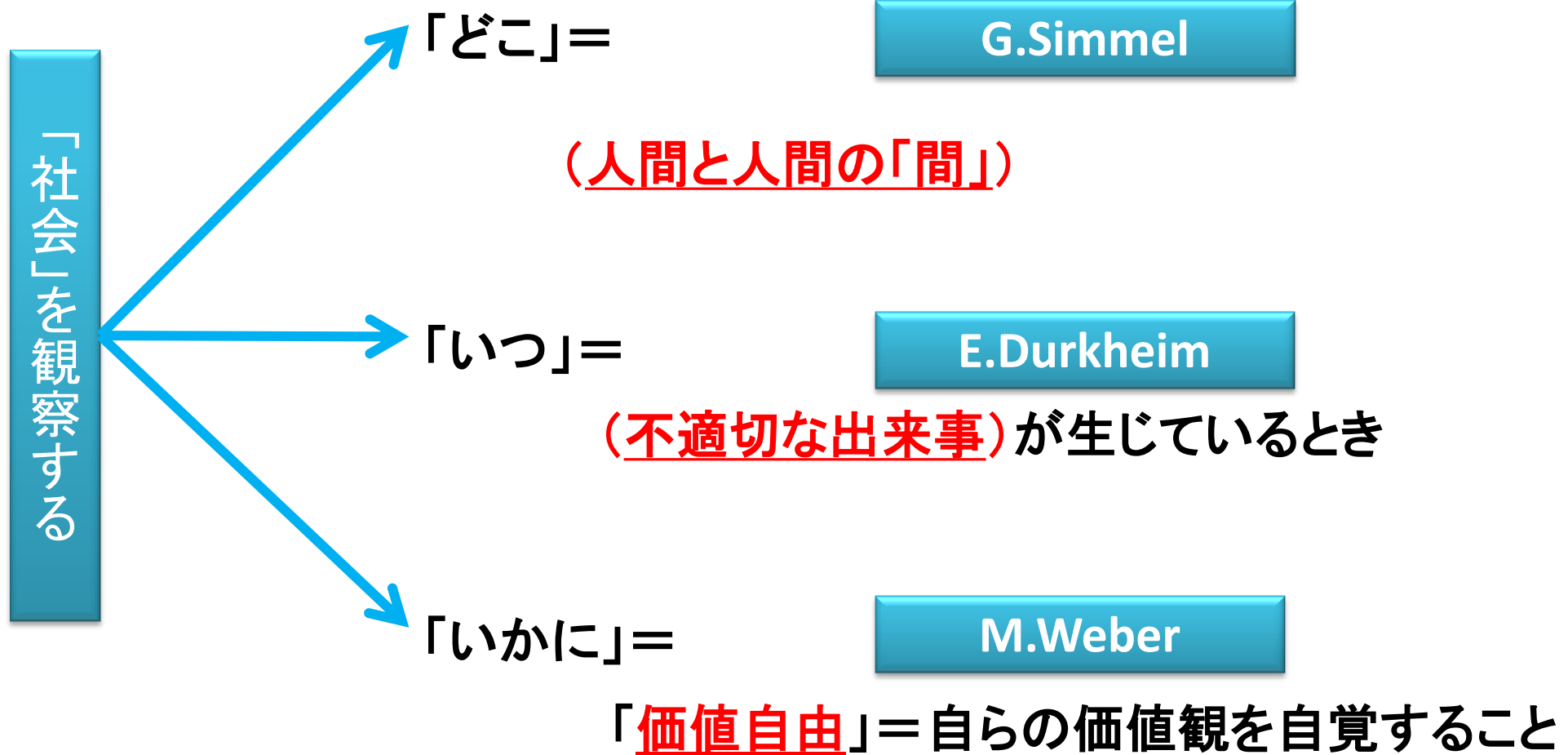
わたしたちは、このような自明性をもった知識、「常識的知識」にしたがって、なかば無意識のうちに日常生活＝「自明な世界」を生きている。

③「社会学的想像力」

「社会学的想像力は、歴史と生活史とを、また社会のなかでの両者の関係をも、把握することを可能にする。」

C.W.ミルス『社会学的想像力』（鈴木広訳、紀伊国屋、1965年）

第2回 見えない社会を見る



①「プロクセミックス」(Hall,E.T)

②「儀礼的無関心」(Goffman.E)

第3回近代と空間観の変化

集団の類型

	区 分	
Ferdinand Tönnies (F.テンニース)	Gemeinschaft (ゲマインシャフト)	Gesellschaft (ゲゼルシャフト)
E.Durkheim (E・デュルケーム)	Mechanical Solidarity (機械的連帯)	Organic solidarity (有機的連帯)
Max Werbr (M.ウェーバー)	共同社会関係	利益社会関係
C.H. Cooley (C.H.クーリー)	Primary Groups (第1次集団)	Secondary Groups (第2次集団)
R.M. MacIver (R.M.マッキーヴァー)	Community (コミュニティ)	Association (アソシエーション)

第4回 近代と時間観の変化

伝統的な社会における自然のリズムに沿った時間、「不定時法」から、機械的で時間の長さが季節や地域によっても変わらない「定時法」に変化したことによって、労働の規律化、時間の貨幣的な性格への変化、ナショナルな時間の成立など、時間によって社会も個々人の内面も測定され、規定されるようになった。

第5回 歴史区分としての近代

17・8世紀西ヨーロッパで始まった西欧的制度と意識が全世界的に拡散した時代

A.Comte	神学的段階	形而上学的段階	実証的段階
	軍事的組織	法律的組織	産業的組織
K.Marx	奴隸制	封建制	資本制
D. Riesman	伝統指向	内面指向	他者指向
M.Weber	合理化の過程		

第6回 社会契約論と私的所有論

T・ホッブズの『リヴァイアサン』やJ・ロックの『統治二論』に依拠しながら「社会契約論」を、J・ロックの『統治二論』とJ・J・ルソーの『人間不平等起源論』に依拠しながら「私的所有論」について学んだ。「社会契約論」や「私的所有論」の歴史的な意味は、共同体（集団）ではなく「個人」中心的な自然法思想を軸に据えた点である。つまり、個人の権利を根本として、法律や制度の正当性をその個々人の「同意」と「契約」に求めた点である。

第7回 労働賛美の時代としての近代

労働観の変遷の略図

古代からの労働一般の格下げ・蔑視

中世までは精神労働の優位

ルネサンス
人間を工作者
(homo faber)
と捉える。

宗教改革
ルターの召命
(beruf)の思想と
カルヴァンの二重
予定説

人間の身体的な労働の再評価

**資本主義的
労働観**

**社会主義的
労働観**

労働の尊厳・労働信仰

第8回 逆説としての近代

M・ウェーバーによれば近代とは、宗教的熱狂という非合理的な宗教改革が結果として世俗内禁欲主義とその「思わざる結果」として合理的な近代資本主義（近代社会）が生み出された「逆説的」な時代であった。

M・ルターの「天職(beruf)」、J・カルヴァンによる「二重予定説」に起因する「世俗内禁欲主義」は、徹底的な現世・自己否定の倫理であったが、このような宗教的に動機づけられた社会的生活態度は、宗教的個人主義を確立させたうえに、規律、勤勉、節約を旨とする「労働・経済」活動に永続的な正当性を決定的に与えることとなった。しかし、彼らにとっては「思わざる結果」として、後に資本主義、理性主義、個人主義、合理主義としての「近代」を生み出した。要するに、見方によっては、神による「選びの確信」を得ようとする極めて非合理的な理由から発生したエネルギーが逆説的にも自立的で形式的な合理化を推し進めたのである。

第9回規律化と臣民化としての近代

M・フーコーにとって近代という時代は、規律化が進展していく時代にほかならない。それは単なる権力による強制や抑圧としてではなく、規律を内面化させられた主体を管理していくような権力が作動している時代である。

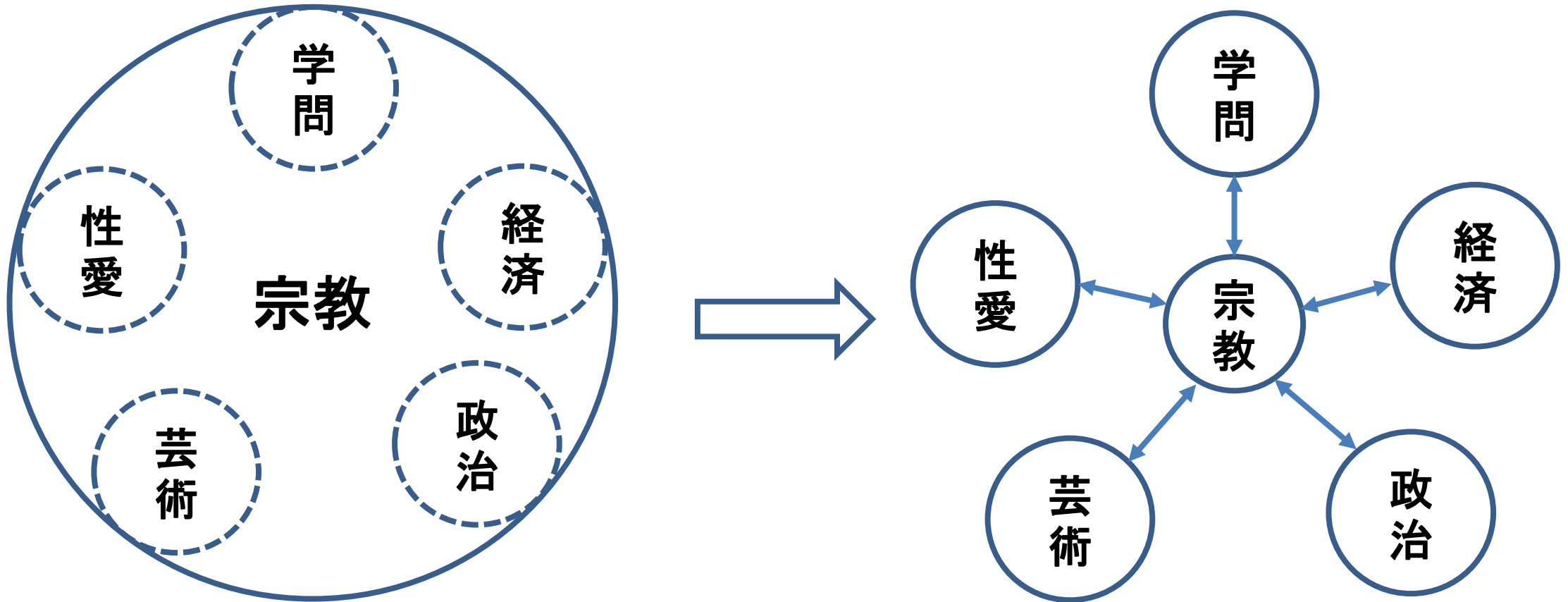
歴史に見れば、権力のあり方が「死なせる権力」/「可視的存在」から「生かす権力」/「不可視的存在」へと変わった。このことを端的に示すのが、M・フーコーの『監獄の誕生』で展開された議論であった。それによれば、18世紀を境にして変化した刑罰の変化はJ・ベンサムによって設計された「パノプティコン」と呼ばれる監視施設の原理によって「規律・訓練型の権力」が成立し、その原理は、近代社会の成立とともに作られた多くの施設・制度応用されることになる。さらに、いえば、近代的な個人(自律的な主体)は決して自分一人で主体になっていくのではなく、「規律」と「監視」の構造を内面化することによって、規範(=社会)に従属することで主体となる。

第10回世俗化の時代としての近代

P・L・バーガーにとって近代とは「世俗化」の時代であった。

・「再び結び付ける」の意味をもった「religion(宗教)」は、伝統社会ではあらゆるものに究極的な意味を付与していたものであった。しかし、「計算可能性」や「予測可能性」を重視する「合理化」の影響のもとで、次第に宗教の社会における影響力が失われた。その結果、共同体や個人にとって「運命」と見なされていた宗教は、個人的な選択の対象へと変貌した。このことによって、かつて人間と神、人間と自然、人間と人間の間に認められていた「意味」と「連帯」が失われると同時に、「共通(公共)的な関心事」が「私事化」していく傾向に拍車をかけた。

伝統的時代から近代的時代へ 分化/世俗化



マックス・ウェーバー「中間考察」『宗教社会学論選』（大塚久雄他訳、みすず書房、1972）
図の出典は、横田理博「ウェーバーにおける宗教展開のダイナミズム」『状況』2000,7月号、91頁

11回 ナショナリズムの時代としての近代

E・ゲルナーやB・アンダーソンよれば、近代とは国民国家が支配的となった時代である。

- ・近代主義的な立場に分類されるE・ゲルナーは、「政治的な単位と民族的(文化的)単位とが一致すべきだとする一つの政治的原理」としてナショナリズムを定義し、その成立の原因を「産業化」に求めた。また、B・アンダーソンによれば、国民は「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体であるとした。

- ・「ネーション」は認識の主題ではなく、信仰の主題に近い側面をもち、ナショナリズムは他のイデオロギーと結合することでその力を発揮している側面を併せ持っている。そして、現在のナショナリズムは、一方では国民を共同性のより小さな単位へと分解する方向に進み、他方では、より大きな政治的単位の中に還元しようとする方向に進もうとしている。

12回公共性の変容としての近代

H・アーレントとJ・ハーバーマスにとって、近代とは公共性が衰退する時代であった。

・「ナチズムの悪夢から出発」して、人間の条件としてまたは健全な社会にとって不可欠な公共性の再生について苦心したH・アーレントとJ・ハーバーマスの議論に学びながら、「公共性」の意義と歴史的な変化についてみてきた。

・公共性の衰退に関するアーレントの理解は、「公的領域(=「活動(action)の場」・政治的=ポリス的秩序)」に社会的・経済的諸要因が侵入してきたことで、私的な利益にもとづく行為が優先されてしまったことにその原因が求められた。またハーバーマスの場合は、生活世界のなかに「経済システム(貨幣)」と「権力システム(権力)」が深く浸透してきたことによって公共性の意味と人間・社会関係が変質してしまったことにその原因を求めた。

13回 マニュアル化の時代としての近代

・G・リッツアの「社会のマクドナルド化」とは、「効率性」・「計算可能性」・「予測可能性」を重視してきた近代社会の合理化を批判的に分析するために用いられた概念である。徹底的な合理化の進展によって、社会はマニュアル的で一元的な管理が浸透し、人間関係を含む社会性までもが「アメリカン・コーヒー化」してしまった側面がある。

・合理的秩序は、必ずしもその秩序の合理性を「理解」し「合理的に」判断する諸個人の行為によるとも限らず、「理屈抜き」に丸暗記したように単なる慣習的・惰性的な服従に基づいて存立して側面がある。その結果、「合理化」による「非合理性」もまた増え続けている。

14回 リスク社会としての現代

- ・生産力の発達に伴う富の配分が階級的であったとすれば、「リスク」の分配は「平等的」な特徴をもつ。
- ・産業社会における生活様式が流動的なものとなり、そこから生じる「不安と不確実さ」の克服は個々人に委ねられるようになった。つまり、近代社会が生み出した「リスク」の破壊力は「個人の身体」に集中し、個人は自らの責任でそれを背負わなければならなくなった。
- ・U科学や技術や企業や医学などによって生み出される危険に対して、議会による民主的統制の強化と科学や対抗科学や対抗専門家の登場に「リスク(危険)」克服の可能性を見出そうとした。